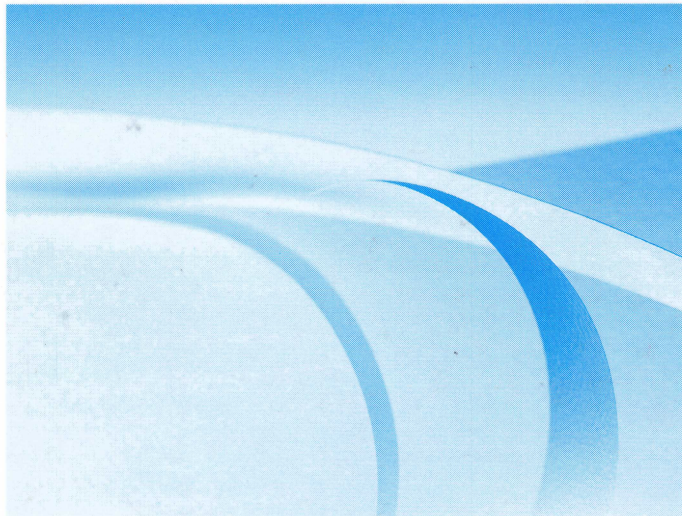


自分史 航跡・Ⅱ 追憶



自分史 「追憶」

序

自分の一生を生育順に縦書きに「追憶」として思い付くまま記述する。日記をつけていない上、古い事でよく記憶しているものとそうでない部分もある。平成四年、自分史を発刊した時ほぼ書き綴っていたものに今回加筆した。当時六十三歳で「定年」を宣言してより、一回り先の七十五歳まで生きていたら、人生の終章として有りのままの自分を曝らけ出すつもりでいた。幸いにと言うか今年はいよいよその年齢に達した。

このように今まで元気に活動出来たのも、一に遺伝子、二に環境に順応、三に忍耐と努力、四にそれぞれの時点で運が味方してくれたと思っている。

信条として人生はネアカでよくよしない、はじめを持って事に当り、十分な準備はするがそれ以上に心配しない、成る様にしか成らないからである。部分的には運まかせの処もあり、結果オーライで自分で納得出来ればそれで良いと思つて過ごしてきた。

人に接するに「和顔愛語」をモットーとし、学問上では恩師より戴いた「知識は人を誇らしめ愛は徳を立つ」を常に心に持して行動するよう心掛けてきたつもりである。

自分史 「追憶」

序

目次

生い立ち 七

小学校時代 七

一枚の写真

自然の中での遊び 八

春の小川

家の手伝い

遊び道具を作る 九

お寺の大桜に登る

池の大掃除

ヤンマ釣り

小動物

笹竹に氷のツララ 一〇

フグの子

釘打ち遊び

蜘蛛の喧嘩

タコ釣り 一一

めじろとり

竹とんぼ

学校帰りはジャンケン

コマ回し

新年の名刺作りと挨拶回り 一二

炭焼きのまね事とお灸

弘法大師のお灸

地引き網

潮干狩り 一三

ビー玉遊び

竹馬、空き缶下駄、輪ころがし

凧づくり 一四

メンコ、パッチン、コッチン

亥の子

亥の子唄（亥の子石の絵）

尻取り言葉 一五

田植え

肝試し 二三

学校のポプラ

火葬場の骨灰取り

兵隊ごっこ (城づくりの絵)

夜学校に

松茸とり 一六

真夏夜の珍事 二四

蝉とり

海水浴 一七

生徒動員 二五

ホタル捕り

疎開班

魚釣り

擬装解体：転落

おこげ御飯

運命の五月十日 二六

運動会

西岩国 浄福寺

わらじ作り

今津の仮宿舎

右脛骨骨折

終戦後 二六

父の励まし

受験 二七

親父の酒

中学校時代 二〇

友魂の碑 (写真) 二八

中学校受験

現在の安下庄高校 (写真) 二九

入学 (当時の安下庄中学校玄関写真)

戦中派の男気

寮生活 (当時の大島郡の町村図) 二二

医学専門学校時代 三〇

引揚者の支援活動

当時の付属病院正面玄関 三一

現在の山口大学医学部の全容

インタビュー時代 三二

五人の寮生（寮入口での写真）

武蔵とお通（写真）

たにしの唄 三四

小児科医師を願望

小児科学教室入局 三五

血液の研究

臨床面では

ダンスの教習 三六

見合い・結婚 三七

結婚後 三八

養父の急逝 三八

開院四十三年を振り返って 三九

はじめに 三九

最初の十年間

松田小児科医院（外来玄関写真） 四〇

自宅の庭（写真）

次の十年間 四一

開院二十〜三十年間 四二

開院三十年〜四十年間 四三

おわりに

役職歴 四五

受賞関係 四六

日本医師会最高優功賞受賞して 四八

突然死の年次推移 四九

海外旅行 五〇

柳井ロータリークラブ入会 五一

診療こぼれ話 五二

腸閉塞を起こした回虫群団 五二

腸重積症の往診

新生児メレナの輸血

| | |
|----------------|----|
| 自宅分婉で仮死状態 | 五三 |
| 点滴がはずれる | 五三 |
| 先生に叱られる | 五三 |
| 入院患者さんの医療費未払い | 五三 |
| 深夜に三人の急患 | 五四 |
| 診察台で死亡していた | 五四 |
| 白血病と診断して | 五四 |
| てんかんの診断 | 五五 |
| 期限切れの予防接種液 | 五六 |
| トイレに閉じ込められた女の子 | 五六 |
| 自動ドアに頭をぶつつける | 五七 |
| 短縮電話のいたずら | 五七 |
| あだ名 | 五八 |
| 好きな言葉 | 五八 |
| 和顔愛護 | 五八 |
| 自然法爾 | 五八 |
| 恩師からの言葉 | 五八 |
| おわりに | 五九 |

生いたち

昭和四年二月六日（一九二九年）山口県大島郡和田村字尾殿九二七番地（現東和町和田）父中野善吉、母ヨシの三男として生まれる。伝え聞く所によると昭和四年の旧正月の生まれで、昭和の御代を正しく育つて欲しいとの願いを込め昭正と名付けたという。

幼少期体格は小さく、運動は敏捷であった。家は代々農家で父も母も働き者で篤農家、近所付き合いもよく、物心ついたころ長兄は神戸高等商船学校に行っていたので、父は学資稼ぎに他家の山仕事や畑仕事によく出かけていたように思う。貧乏者の子沢山苦しい生活であったようだ。長兄・長女と交互に四男、三女の七人兄弟姉妹であった。当時はどここの家でも子沢山であり珍しい事ではなかった。

母は朝早くから夜遅くまで働き、なお夜なべなどして家事一切を切り盛りして子育てに忙しく、休む暇もない程で寝ている所を見たことはなかった。優しくかったが正邪は厳しくしつけられたように思う。祖父母は別棟所帯で隠居していた。祖父は長く白い眉毛で耳は大きく話上手で近所の子ども達を集めて昔話をよくしてくれた。行儀よく話を聞くと褒美に戸棚から大きな瓶を取り出して金米糖をくれた。祖母は私や妹を誘って近くのお寺によくお参りしていた。

小学校時代

昭和十年和田小学校に入学、家から五、六百米位、近所に同じ年頃の子どもが多く、山野を飛び回って遊んでいた。

一年生の受け持ちは原先生、先生は泊部落に住み、明治調の紺の和服・羽織袴のよく似合う優しさの中に厳格な明治女と言った印象。二・三・四年生は岡田先生、先生は小松の人で母親と泊部落に下宿していた。いつも紺の洋服姿がよく似合ったがヒップが大きく子供心にあまり良いスタイルでなかったようだ。だが面倒見のよい優しい先生であった。五・六年生は中村先生、先生は伊保田から自転車を通っていた。勉強熱心で教え子に慕われていた。いずれの先生も依怙鼻真なく子供たちに好かれ慕われていた。

一枚の写真

長兄が神戸から帰った夏休みに、近くの大きな池の堤でラシニング・シャツと半ズボン姿で写った幼な顔の腕白な写真があった。余りいい格好ではないが自然味があつて夕日に眩しそうにしている。

大切に保管していた筈だがこの度見つからず残念。

自然の中の遊び

我々の子どもの頃の遊び道具は、殆どが先輩や大人から教わった手作りのもので、遊びもそれぞれ人数や場所によって体を動かす遊びであった。今の子供たちはマイコン、テレビゲームなど人から与えられた受動的・知的な道具で多くの子供が集まっても集団的な遊びは少なく、それぞれが一人で楽しんで遊んでいる。どちらの遊びがどうという比較ではなく時代時代によって変わるのは当然と言える。創意工夫、対人関係、成長期の身体的な影響など古臭いかも知れないが我々の子供の頃を思い出しながら思い付くまま綴ってみることにする。

春の小川

春の小川は子供たちの格好の遊び場となる。小川の砂を盛り流れを堰止めて小さな池を作り、笹舟を浮かべたり桐の木片をけずって手製の舟を浮かべたり、またゴムの動力でスクリユウを回転させて舟を動かすなど。時には小エビ、小ブナ、ドジョウ、メダカ、ドンコなど掴まえて水に濡れながら夕方まで飽きることなく遊ぶ。

童謡の春の小川、メダカの学校、ドングリころころ、夕焼けこやけ、カラスの子なども心に歌と共に素朴な自然が

楽しめた。

今は田舎の小さな山道も舗装され車が通る。小川はコンクリートで護岸され、砂遊びや水遊びの場がなくなって昔の遊びは出来なくなり雰囲気もない。

春の田圃はレンゲやスミレ、タンポポなどが咲き乱れ、草花を摘んで首飾りを作ったりした。池にはオタマジャクシの卵が黒大豆の寒天様のものが数珠つなぎに、黒の水羊羹の紐が所狭しと池一杯拡がり、そのうちオタマジャクシの黒い魂りとなって池の中を帯状になって同じ方向に泳ぐ、やがて手が出、足が出て池の周りは小さな蛙の集団で足の踏み場もない。黒玉の水羊羹を少し家に持ち帰って洗面器に入れて毎日観察。黒玉が破れて尻尾のついたオタマジャクシになり、手や足が出て、泳ぎ、歩き、尻尾が短くなってやがて本物のカエルになったのを観察した事がある。

家の手伝い

小学校時代は家の手伝いと言っても台所や風呂の水汲み、燃料の割る木運び程度で、時には農業の手伝い主に草ひきだつたが嫌であった。雨降りには子供の役としてダイガラで米搗きをする。子供の体重では杵の先が持ち上がり難い、妹と二人掛りで米を搗いた。大島地方の大抵の農家には米搗き用のダイガラがあり、苗代づくり、田植え、稲刈り、脱穀、米

搗きとすべて自作自営であつた。

遊び道具を作る

竹や木を近くの山に取りに行き、水鉄砲・紙鉄砲・杉鉄砲などを自分で作る。竹トンボやチャンバラゴツコの木刀まで近所の子供が集まって競争して細工する。時には肥後の守という小刀で手を突いたり切つたりもする。そんな時にはヨモギの枯れ葉を手でもんで傷に付けておくと自然に止血する。当時、肥後の守という小刀は男の子なら誰でも持つていた。

お寺の大桜に登る

近所のお寺（禅宗Ⅱ正岩寺）に大きな桜の老木があり、七抱え程で、春には庭一杯桜が咲き乱れていた。その桜が散ると後に小さな桜んぼが実る。近所の子供が集まってきて桜の木に登り、桜んぼの実を取つて食べていた。赤い実は熟していないが黒ずんで来ると美味しくなる。彼岸のころから札所のためお遍路さんが巡つて来、ささげ御飯のおむすびが接待される。そのおむすびを貰つて食べ日暮れまで隠れんぼや鬼ごっこ遊びに夢中で過ごす。四月八日はお釈迦様の日、お寺の甘茶堂は春の色とりどりの花に飾られ甘茶が振る舞われた。境内は子供たちの遊び場、本堂の裏には葬式に使用された道具が置いてあり、そこを通るのが子供心に怖かった。

池の大掃除

お寺の門前に大きな灌漑用の池があり、春はオタマジャクシの行列を眺め、蛙になる頃には道路を歩く事が出来ない程大量発生する。夏には池の水を抜きとり、水が少なくなると土手を走り回り、トンボとり、完全に水が少なくなると池の中に入りどろんこになつて鮒や鯉等を追つかけ回す。子供にそう簡単に掴まるわけではない。池の栓を開けると井手の流れに沿つて小さな鮒や鯉が見え隠れする。それを掴まえる方が面白い。

ヤンマ釣り

ガンザキか竹箒でそーと、トンボの仲間では大型のメスマンマを先ず掴まえ、メスマンマの胴体を縫い糸で縛り、一米位の糸の先を竹に結び飛ばしていると、どこからともなくオスマンマが近づき、メスマンマと接合する。その時素早く掴まえる。面白い様によく釣れる。片手の指間に挟み一杯になると手を抜け放すとヤンマは嬉しそうに大空に飛び立つ。

小動物

田舎の田畑、野山、至る所にカニ、ヘビ、カエル何でも遊び相手である。オバコ草を少し縫い糸につけて、蛙の前に垂

らすと飛びついてくる。カニも鉢みで挟んで離さないの
く釣れる。大きな蛇は嫌いだが追えば逃げる、生まれたば
りの小さな蛇は可愛い。ポケットに入れて学校に持って行き
友達の中にに入れてびつくりさせたりして悪戯振りを喜ん
だりしたこともある。すべて自然の中の小動物も遊びの対
象であり、死んだ時には弔うため土を掘って埋め、墓を作っ
てちび丸とか、ちび助など戒名をつけ葬ってやっていた。

笹竹に氷のツララ

冬になると酒屋の水取り用の竹樋が上流の小川から二km位
道路の脇に続いている。竹樋は竹の節をくり抜き枕木を介し
て繋ぎ合わせ長い竹の樋としたもの。その竹樋に錐で小さ
な穴を開け、噴水状に道路脇の笹竹に水を噴き上げさせてお
くと寒い朝には笹竹に氷のツララが沢山出来る。チンチロリン
と言って氷の魂を食べたりしていた。穴は昼間栓をして水漏
れしない様にしておく、酒場の巡回のおじさんは見つけても
子供たちの悪戯と大目に見て貰っていた様に思う、叱られた
ことはなかった。

フグの子

家から一km位の所に氏神様の筏八幡宮があり、その前に広
い運動場があった。そのそばは入江になった白砂の浜に小さ

な綺麗な貝が沢山いた。生まれたばかりの小さなフグの稚魚
がいて追っかけ回して遊ぶ。フグは身の危険を感じると砂に
潜ってしまう、掴まるとお腹に空気を入れて大きく膨らまし
て丸くなる。海面に戻してやると浮いていると思いきや空気
を抜いて素早く逃げて行く、飽きることなく面白がつて幾度
も繰り返してたわいもなく遊ぶ。

釘打ち遊び

三寸釘をやや柔らかい地面に立てて線引きし、交互に陣取
りをする。蜘蛛の巣のように周辺を取り巻き相手を包囲して
出られなくなった方が負ける。一回ごとに交代する。また釘
が地面にうまく立たない時にも相手と交代する。

蜘蛛の喧嘩

大きく強そうな、足長でスタイルのよいやや痩せ型の背中
横三本の金色の筋のある蜘蛛を野山を探し回り、捕って来た
蜘蛛を家の近くの草木に一時宿す、その蜘蛛を近所の子供た
ちが持ち寄って三十cm位の木の棒の両端に乗せ、近寄らせて
喧嘩をさせる。弱い蜘蛛は逃げるか追い落とされる、逃げ遅
れると糸で巻かれてしまう。全部糸を巻かれると窒息死する
ので少し巻かれた時、頃合を見て糸をほくして逃がしてや
る。命を助けてやり元気になり、また強くなるのを待つわけ

である。黄金蜘蛛は背中に金色の筋模様があり、多角形の巣を上手に張り巡らし、中央に鎮座する。時には俺様の作という一際目立つ自慢のサインを入れている。体と足が細くスマートなのが雄、ぼつてりと肥っているのが雌。

タコ釣り

小船の上から四手の釣のついたものに小魚を真ん中に入れ、磯のタコのいそうな場所を探して吊り下げる。タコは穴から出てきて四手の上に近付き小魚を抱き抱える。時を見計らって四手の釣を素早く引き上げるとタコが捕れる。面白い方法である。

めじるとり

竹ヒゴを組み合わせて竹籠を作る。器用な子供は大人に作り方を習って細い竹ヒゴを何本も作り、別に木杵を造り錐で穴を開けるなど面倒なメジロ籠を作る者もいた。

めじろの居そうな山に行き、竹藪とか梅の木のある場所で囀のめじろの入った鳥籠の上に鳥籠のついた小枝をさして暫く待つ。鳴き声にメジロが誘われて近付いてくる。メジロが鳥籠のついた小枝に止まると足に鳥籠がついて逃げられなくなる。そこを見計らって素早く捕まえる。暴れると翼に鳥籠がくつつくので素早く取り押さえることが肝心。

竹とんぼ

竹をプロペラ形に削って、中心に穴をあけ、別に作った竹ひごを差し込む。心棒を両手で刷り合わせて空中に放すと高く飛んでいく。飛ぶ距離を競う場合と飛ぶ時間を競う場合がある。

学校帰りはジャンケン

同じ方向に帰る友達と学校帰りにジャンケン遊び、ゲー、チヨキ、パーで勝った方が二歩先行し、家の近くまで遊びながら帰る。勝つたり負けたり、余り勝負が片寄ると距離が離れ過ぎ、また明日やり直す。田舎道ゆえ車の通る心配はななく、のどかな中のんびり呑気なもの。

コマ回し

お正月前後はコマ回しの季節、コマは重心とバランスの問題。長時間よく回るのを競ったり、喧嘩に強い喧嘩コマを自慢したりする。紐で操るコマの曲芸などもやっていた。

喧嘩に強いコマを作るにはコマの周囲に鉄の輪を何重にも重ね巻きして、重心を低くする。上級生になると夫々が工夫してやっていた。コマとコマをぶつつけあうと接触して火花が散る。子供心にそのスリル感があつた。紐で操るコマ芸の

上手な者もいた。

新年の名刺つくりと挨拶回り

冬休みになると画用紙を切って新年の名刺つくりをする。現在の名刺より倍くらい大きめの名刺を各人がつくり、学年名前、明けてましておめでとうございませと書き、各先生の家に行つて挨拶をする習わしがあった。留守のときは松飾りの玄關を入ると名刺受けのお盆があり、その中へ名刺を入れて帰る。上級生たちは学校で奉安殿から天皇陛下の写真を取り出して飾り、厳かに新年の四方拝が行われていた。

炭焼きのまね事とお灸

子供たちが集まつて畑の土を二十cm四方掘つて、周囲を粘土質の土で固め、十cm程度の木片を集め縦に並べ、焚口を造り、煙突は青竹で、天井は粘土を厚めに張り、落ちない様に造る。焚口で薪を燃やして、中の木片が燃えだしたら焚口を石や粘土で塞ぐ。子供の遊びにしても親父の炭焼き窯そっくりによく出来ていると思う。

後で親に見つかつて大叱られ。子供の火遊びは最も禁じられている遊びで、人差し指の中節の上にヤイト（お灸）をすえられ、泣きながら二度と火遊びをしないことを諭される。今でもその傷跡が僅かに残っている。相当な童顔坊主であつ

た様に思う。

弘法大師のお灸

当時、大島地方には夏の土用になると弘法大師のお灸をする習わしがあり、無病息災、虫封じを願つて臍の左右に二箇所、背中斜めに三箇所のお灸がされた。順番に泣き叫ぶ子を押しえ付けて行つ。子も辛いが親はもつと辛かつた。だろつがよかれと思つてのこと弘法大師も罪なことを考えたものである。

地引き網

学校が終わると午後は地引き網の手伝いに子供たちは浜に集まる。各自適当な体に似合う大きさの竹籠と共に籤引き用の一m位の縄を持つて行き、大網がイワシを囲んで網を入れると大船が岸に着くまでに左右に分かれてグループをつくり、大きい人がその頭になり、各自が縄を持ち寄つて当たり籤をつくり、籤引きをする。当たつた二・三人が網引きの手伝いをする為大船に乗る。籤引きに外れた子は夕方まで海岸で遊んで帰る。大船で網を引く手伝いは、回転盤に大人四・五人が棒をさして力強く回転する。その際網の重り用の石や浮樽が回転盤を回る時交差する。それが引つ掛からないように内側で子供が石や浮樽を交わすのを手伝うのである。

イワシ網漁は見張りの親船の指示により二隻の大船がイワシの群れを囲み、網を絞ってイワシを追い込んで捕る漁法である。網を引き終えると収穫に応じて大人も子供も平等に捕れたイワシを分配してくれる。籤に当たると運がつかないという誰にも見られない所で鍋の蓋を頭に乗ると運がつかないという言い伝えがあり、内緒で鍋蓋を被った記憶がある。

潮干狩り

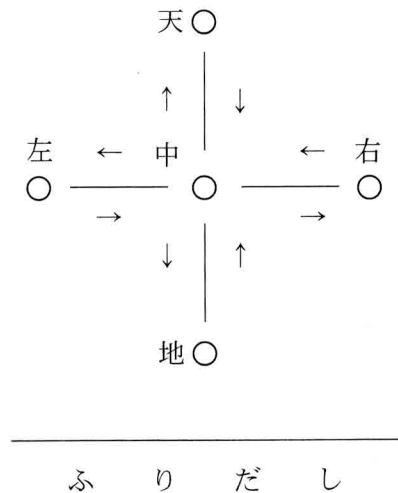
魚釣りや潮干狩りにもよく出かけた。春秋の彼岸ごろは大潮で干満の差があり、干潮時には多くの人が潮干狩りに出かけた。貝類やナマコのように動かないものから時には動くタコを捕まえた事もある。遊びながら海岸で楽しむと言ったところ。また、一山越えて「くろがえ」の浜までヒジキやフノリなどを採りに行った事もある。

ビー玉遊び (マール)

直径七〜八mm大きいものでは二〜三cmのビー玉で遊ぶ。ビー玉にはいろいろな綺麗な模様がある。一般的には清涼飲料のラムネの玉を使っていた。

十文字の真ん中と左右それぞれの端に小さな穴を掘り、振出しから最も遠い穴にビー玉を投げて、一番穴に近い者から順に玉を入れて行く、五箇所の穴を早く回った者が勝ちとなる。

る。他人のビー玉に当てるか目的の穴に直接入れると次の穴に進める。他人の玉に当たらないか目的の穴に入らないと代する。



ビー玉を人差指の腹に乗せて親指で弾くか、中指の腹に乗せて親指で弾いて目的の方向に飛ばす。

竹馬、空き缶下駄、輪ころがし

一〜一・五m位の竹を二本用意し、高さ二〜三十cmの節の所に木の板を二枚縄で括り付けて作る。歩いたり走ったりまた足の位置を高くして歩く事を競っていた。

空き缶下駄は缶詰の空き缶に穴を開け、縄を通して手で持って下駄の様に歩く。

輪ころがしは樽の竹の輪を木の棒で操り上手に輪をころがす遊びであった。

凧つくり

冬になると寒さも忘れて竹ヒゴを作り、それを組み合わせて凧の骨組みを造り半紙を貼り、各自が手作りの凧を競い合い、風向きを選んで揚がり具合を楽しんでいた。子供は凧の子と言われ寒空でも平気であった。

メンコ・パッチン・コッチン

当時、遊び友達が集まればメンコ・パッチン・コッチンが常習であった。各人一枚の札を出し、順番に札を地面にぶつつけ、風圧の煽りで他人の札が裏返しになれば自分の物になる。裏返しにならない時は交代する。表面には兵隊や飛行機・軍艦などの絵があった。

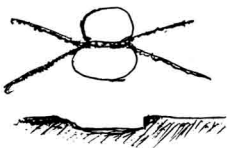
コッチンは百円玉くらいの大きさで二mm位の厚さがあり、蟬が沢山塗つてあった。各人が一枚づつ出して順番にコッチンの端に投げ付けて裏返しになると自分の物になる。また親指と人指し指に挟んで遠くへ飛ばし、飛距離で勝負を決めていた。

亥の子

中国の古事に基づく年中行事の一つで、十月の亥の日、亥の子行事は部落の男の子数人が達磨型の亥の子石に数本の縄を結び、各家庭を順番に回り家の庭先で唄に合わせ縄を引っ張ると亥の子石が上下し、地面が少し凹む程度に打つ。家内安全・商売繁盛と唱え、収穫に感謝する行事である。

亥の子唄

亥の子、亥の子、亥の子さーと言う人は 一に俵をふんばつて 二にっこり笑うて 三に酒を作つて 四に世の中よいように 五ついつものように 六つ無病息災に 七つ何事も無いように 八つ屋敷を拓いて 九つここに蔵を建て 十でところの大評判、繁盛せ 繁盛せ
大体こんな唄、だつたように記憶している。その家の人は子供たちにお菓子や飴、あられ菓子、金米糖などを振る舞つてくれていた。



亥の子石

尻取りことば

田舎での読み物といえ、少年クラブ、のらくろ一等兵、冒険ダン吉など極く限られた本を誰かが買ってきた物を回し読みしていた。今でも記憶しているのは小学校時代に覚えた尻取り言葉がある。

- 1、一番楽しいお正月
- 2、学校に集まって四方拝
- 3、ハイハイ、モシモシ電話口
- 4、口から病は入り易い
- 5、安い鉛筆じぎ折れる
- 6、留守を頼んだお爺さん
- 7、サンタクロースのプレゼント
- 8、隣のじいさん潮干狩り
- 9、ガリガリ噛むのはおセンチ
- 10、ペイトーペンは音楽家
- 11、海軍陸軍飛行隊
- 12、台湾年中暑いところ
- 13、床から這い出す朝寝坊
- 14、坊やはあんよがお上手だ
- 15、段々近付く沖の船
- 16、船の上には七福神
- 17、尋常過ぎたら高等科
- 18、加賀の読み物何としよう
- 19、少年クラブは日本一

田植え

梅雨時期になると家中が忙しくなる。苗代作り、糶撒き、田づくり、田植えと次々に農家の仕事はきりが無い。一家総出で棚田は賑あう。子どももそれぞれの仕事があり、苗採り苗運びなど手伝いをする。耕され水を張った田圃の左右に棒に巻かれた紐に三十cm間隔に赤い糸で目印された紐を張り、その赤い目印の所に苗を数本挿んで植える。大きな田圃では

家族の他近隣の手伝いの人達大勢が横一列に並び田植えをする。労働の後の休憩や昼食はおにぎりを頼張って普段より余計に美味しい。

田圃の山手に大きな山桃の木があり、登って山桃の実をもぎ取る、手の届かない所は揺さ振って下に落とす。丁度この時期に山桃の実が熟す真つ盛りである。

学校のポプラ

小学校の校庭に三本の大きなポプラの木があり、秋になると葉っぱが黄ばみ校庭に散乱する。そのポプラの葉の茎をお互いに持ち寄り茎を交差して強さを競う。丈夫そうな茎を何本も家に持ち帰り軽く塩漬けにして一・二日おくと水分が抜け茎が弾力を増し、撓って強くなる。強そうな茎を持っている人と自分の持っている茎とを交差して強さを競う遊びが毎年の様に繰り返されていた。

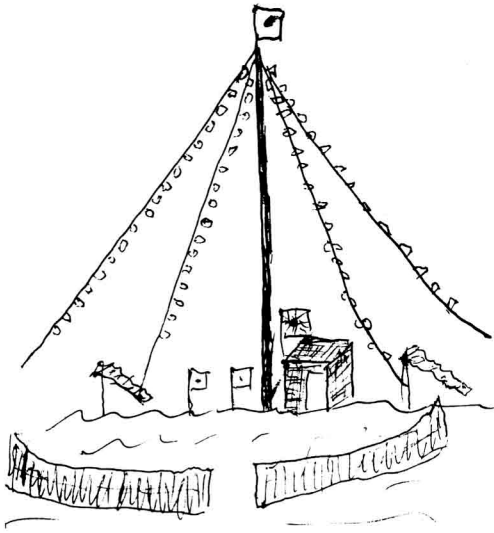
兵隊ごっこ

当時の男の子の集団遊びは専ら兵隊ごっこであった。和田部落は北側が海に面し、地形的に東南西の三方向は山に囲まれている。東から泊部落、尾殿部落、郷部落、庄ノ浜部落があり、一部落十〜十五人程度の男の子がいたと思う。各部落は見晴らしのよい小高い丘に藁で囲んだ城(陣地)を造り、

各自が1mくらいの竹の棒を持ってチャンバラごっこをして追っかけ回して遊んだ。竹の棒（刀）が相手の体に触れると負けとなる。一応死んだ事になりその場では活動出来なくなるがすぐ復活する。

四月三日数日前に陣地の城を造り、前夜には斥候役や見張り役を置いて泊まり込み、弁当も持参していた。

城には縄に旗を吊して数条に張り巡らして満艦飾の威力を示し競い合った。旗づくりは下級生の仕事であった。丁度四月三日の部落挙げての花見を兼ね、花も咲き最高潮に盛り上がった。



城（陣地）づくり

松茸とり

十一月、朝夕冷たさが増すころになると松茸の出る季節である。どこの山のどの当たりに松茸が出るかは長年の経験で分かっていた。近所の友達二・三人で松茸採りによく行った。小さな籠一杯採れた事もあり、親戚や近所に配って喜ばれた事もある。母は松茸採りの名人？朝早く出かけて籠一杯採ってきたのをよく覚えていいる。場所は誰にも内緒で教えて貰えなかった。

蝉とり

豊富な自然、蝉を含め全ての動物・昆虫が遊び柏手、蝉も当然沢山いるので素手でも捕まえられた。油蝉が最も多く、熊蝉、チイチイ蝉、ツクツクボウシなど、熊蝉は高い木の先の方にいるので子どもには容易には捕まらない。水鉄砲で水を掛け追っ払ったりしていた。チイチイ蝉は鳴き方がチイチイと鳴くのでそう呼んでいた。盆過ぎて秋近くなるとツクツクボウシの定番で流線形ですばしっこくなかなか掴まらない。

海水浴

夏は子供の天国、パンツ一枚で真っ黒に日焼けした裸で海に入る者、砂浜で甲羅干しを楽しむ者、それぞれ思い思い海

水浴を楽しんでいた。満潮になると泳ぎ自慢の人達が集まって競争したり、リレーしたり賑やかであった。干潮になると浅瀬でシヤコ掘りや小魚を追っかけたり、やどかりなどと戯れたり一日中遊び呆けていた。

昔の海岸は綺麗な砂浜が多かった。穴を掘り砂を掛け砂風呂に見立てて寝ころぶ姿もあり微笑ましい。

大島通いの大島丸が港に入ると泳いで船に近付き、船員に見つかからない様に乗客口の反対側に回り船に乗り、甲板に登って発船でスクリユーで巻き上がる渦の中へ飛び込むのを楽しむ姿も懐かしい。

ホタル捕り

家の近くは田圃で梅雨時から田植えが済んだ頃までホタルが沢山飛び交う、素手でも捕れていた。捕ってきたホタルを蚊帳の中に入れて寝付くまで楽しみながら眺めた。今の様な網で出来たホタル籠はなかったので、収穫後の麦の茎を上手にあんで籠を作つてその中にホタルを入れて家に持ち帰つた。また麦藁細工の籠は桑の実や野生のイチゴの実などを入れるのにも使っていた。

魚釣り

親戚の同級生の家は半農半漁で小船を持っていたので、誘

われて魚釣りや地引き網によく付いていった。モーター付きの船であったので小島を巡つて魚釣りをしたり、地引き網をして小魚を捕っていた。昼時になると海水でお米を研いで七輪で炊く、その御飯は塩味がして特に美味しく、また捕れた魚を焼いて食べるのも新鮮で美味しい。

地引き網に小さな綺麗なカナコギ（カラコギ）が混じつて捕れている。全体が赤白の斑模様で見た目は綺麗だが背に赤い鱗があり刺されると可なり痛く腫れる、オシッコを掛ける（アンモニアで中和する）習慣があった。

おこげ御飯

田舎では何かにつけて親戚縁者の「よばれ」があり、私の両親や祖母は縁者が多く、子供まで「よばれ」に案内されていたように思う。

子供同士でジャンケン遊びや鬼ごっこなどして走り回つて遊び、遊び疲れたころ、一斗炊きの大釜で炊いた御飯を掬い取つた残りの御飯が釜に焦げ付いている、その「おこげ」に少量の砂糖と塩を振り掛けて蓋をして残り火で少し蒸すと美味しい「おこげ」が出来る。それを貰つて食べるのが楽しみの一つでもあった。

現在のように仕出し料理屋から料理を取るのではなく親戚縁者や近所の人が集まって全ての料理を手作りして振る舞つ

ていた名残である。

運動会

天高く秋の空は澄み渡る。毎年十月下旬頃学校から1km位の処にある筏八幡宮の境内広場で運動会が行われた。

前日午後、上級生が大八車で運動用具を運び準備をする。兄弟でも紅白に分かれそれぞれを応援し、口論する姿を思い浮かべる。

毎年の事であるが、子供たちは皆生き生きとして、ランニングシャツ姿に紅白の鉢巻きを結び、元氣よく飛び回る。

昼時になると親の居場所を目掛けて走っていく、手作りのお弁当を車座になつて食べる。卵焼き、海苔巻き、稲荷ずしなど平素口に出来ない食べ物である。また中秋から晩秋にかけて実る果物も多い、柿・栗・みかんなど。

運動会の花形は紅白のリレーで黄色い声援が乱れ飛ぶ中で紅白の得点が発表され幕を閉じる。毎年ながら懐かしい思い出の一つである。

わらじ作り

雨降りの日、父は納屋に入つて「わらじ」作りをするのが常で、上手でしかも早かつた。見よう見まね、時には要領を教えて貰つて、わらじ作りに挑戦する。

先ず藁を木槌で少し打つて柔らかくし、両手で寄りを掛けるながら縄を作る。よく滑るようにアクタ(藁の屑)で縄を擦ると綺麗な縄が出来る。背丈ほどの長さの縄を四つ折りにして両足親指に引つ掛け、左手三本の指で受け、手前より藁を交差しながら編んで行き、途中鼻緒になる処で別の藁紐を組み入れ、足の長さ程度になる処まで編んで最後に中二本の縄を手前に引き抜くと片方のわらじの出来上がり。両方のわらじを作り、鼻緒をくつつけると出来上がる。

親父のわらじは天下一品であつた。

右脛骨折

校庭の滑り台で滑っている途中、ズボンが引つ掛かつて転び落ち、右下腿を強く打ち、皮下出血を伴い打ち身になっていた。田舎の事ゆえ一週間程度学校を休み養生する。

村で一軒のお医者さんが病氣休診中のため、代診の先生に見て貰つて安静と湿布を繰り返していたが患部が次第に腫れて来て痛みが次第に強くなり、柳井港の周東病院で診察を受けるように薦められる。

痛みのため全く歩く事が出来ないので父におんぶして貰い家から逗子が浜の船着場まで1kmあり、定期船で三時間かけて柳井港に着く、港から病院まで馬車に乗つて行く。当時病院といえは周東病院しかなく、何人もの病人や付き添いさん

が馬車に揺られて病院に向かう。

外科のお医者さんは、即日入院手術の必要ありという。脛骨が完全に折れているので止め金を入れて固定し、ギブスを巻く。三週間安静後手術の傷跡も治り退院となる。ギブスは膝より足の先まで巻かれ、趾先と踵の一部に穴が開けられていたが足の中が蒸れて痒みがあり、搔くことも出来ず我慢するのみ。退院一週間ギブスを外して歩行出来る様になった。

兄弟の多い中、母は家事に追われ、父は小生の病氣入院のため仕事も出来ず入院費用も掛かり難儀したと思う。父も母も何一つ愚痴も言わず、励ましてくれた。父の大きな背中におんぶして貰った時の、その温もりが今でも暖かく伝わってくる。

父の励まし

天気の良い日、父と二人で弁当を持って山仕事に出かけた。昼時になり見晴らしのよい山の上に登り、弁当を食べながら、今からは学問しなければ駄目だ。前方の海の向かうに本州がある。日本は広い、井の中の蛙では駄目だ。兄が神戸の高等商船学校を卒業するから今度はお前に学資を工面する事が出来る。と親の思いを幼鳥に託すように諭された事を今でも昨日の事のようによく覚えている。

親父の酒

お酒好きな親父はいつも晩酌は焼酎をコップ一杯飲むのが決まりであった。調子のよい時や夕食後生きのよい肴が手に入るともう一杯追加して飲む事もあった。

祝い事など飲み会があると、帰りは酔ってハクシヨンの連発で遠くからでも親父の帰りはすぐ分かった。酔って帰ってくると家でもよく唄を歌っていた。親父の得意な唄は二十二型の時計が無くなるという唄で、意味は生き馬の目を抜くという銀座の真ん中で、背負っていた時計がいつの間にか無くなるという唄であった。また兎ちゃんと人参という唄もよく歌っていた。お祝い事の時には若松さんもよく歌っていた。酔えば酔う程に陽気で愉快になるいい酒飲みだった。ハクシヨンが出るのはお酒の適量を告げる印だったのではないかと思っている。

お酒を飲むと歌ったり踊ったり、子供心に親父の酒はいい酒と思っていた。